



## ショートストーリー 「しおりがわりに」

文：山村光春 写真：伊東俊介

おそるおそる声をかけると、彼女はむくりと顔を上げた。そして僕を見るやいなや、最初への字だった口がぽかんと開き、やがて下のくちびるがむっと突き出たかと思うと、ついには大声で泣き出してしまった。

エーン、エーン。

まさか今どき……とも言うべきベタな泣き声で、こっちがあっけにとられるほど大仰に。

彼女と最初に会ったのは……いや、ただこっちが一方的に目にしただけだが、ともあれ朝の通勤電車の中だった。

仕事場が街の中心とは逆方向なので、車内はいつもさほど混むことはなく、乗って20分もすれば、座っていても向かいの窓からの風景がよく飛び込んでくる。ちゃちなラブホテルに病院、2×4の住宅、住宅。学校に桜の木に電信柱、そして川。人生劇場の舞台よろしく、右から左へさまざまなものが通りすぎていく。美しかろうがなかろうがまったくもって関係なく、それらが朝のかたむいた陽射しを遮り、くるくるとまたたく間に日陰になったり、日なたになったりするさまは、なかなかどうして、実にドラマチックだった。毎日見てはいるけれど、その日はとりわけ光が強く鋭く、ノリが実によかった。

この決定的瞬間を見て、感じている人はいるだろうかと、視線を前のシートに向ける。

左からケータイ見てる、寝てる、ケータイ見てる、ケータイ見てる、寝てる（あられもなく）。隣のシートに移ると（こっちも）ケータイ見てる！

絶望的な気持ちで首をぶうんとふると、車両の隅っこに窓の外を見ている人影が見えた。

それが彼女だった。

年のころはぱっかり20代のまん中くらいだろうか。もう気温はあたたかく、ずいぶんと春めいているのに、深みどりいいろのストールを首にぐるぐる巻き、洗いたてのようなつるんとした肌に頬が少しあかい女の子。

ドアに身体の左半分をあずけ、頭はガラス窓にくっつけてさも眩しそうな表情で、せわしなく変わる光と影を見ていた。

そして両手を胸で交差させ、抱えこむようなかっこうで本をたずさえていた。ちょうど読みかけなのだろう、右手の人さし指を本の間にはさみ、しおりがわりにしていた。

僕はいま、この美しさを感じているもの同

士として、さも勝手な親近感を抱いていた。いや、正直に言おう。彼女の顔に、たたずまいに、しおりがわりにした人さし指に、たちまち恋をしてしまったのだ。

彼女はしばらくすると、ゆっくり本を開いて視線を落とし、話の続きを読みだした。僕はもう外の景色より、彼女の一挙一動をガン見していた。

右足をときどき上げ、甲のあたりで左足のふくらはぎをなでるようにクロスする。それは彼女のクセらしかった。誰かが知らないうちにしている動作は、本人がおそらく意識しているいないにかかわらず、秩序的かつダンサブルで、はたらみているほうは、それがおもしろくなってしまう。

もうひとつ。彼女のクセとも言えるのは、ずっと本を読んでないこと。少し読んでは顔を上げてしばらく外を眺め、また読んで、と目は定期的に行ったり来たりしていた。

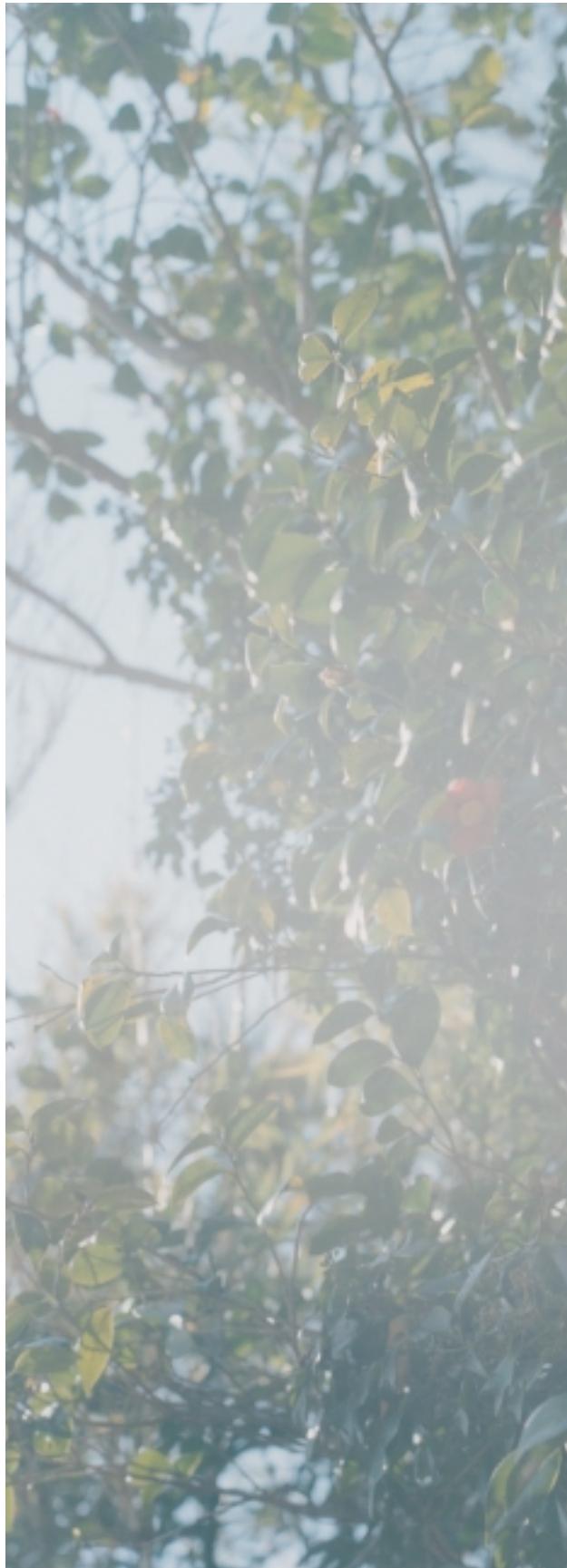
確かに彼女は僕と同じ外を見ていた。けれど、ほんとうは何か別のものを見ているような気がしてならなかった。

ある駅で電車は停まった。彼女は何かに弾かれたようにびくりとし、きょろきょろと辺りを見回したかと思うと、ひょいと軽やかに電車を降りた。本もバッグにしまわれることなく、また人さし指を間にはさみ、右手に持ったままだった。

そして歩き始めようとした瞬間、本にはさまれていたしおりがはらりとホームに落ちた。でも彼女はそれにちっとも気付くことなく、そのままさっさと行ってしまっている。僕は一瞬ためらったのち、ドアが閉まる瞬間に電車を降りた。



ショートストーリー  
「しおりがわりに」



降りてしまった。会社のある駅はまだ先だというのに、このままでは遅刻をしてしまうというのに。しかしうしごなほど罪悪感はなく、何か当然のごとく与えられた使命のような心持ちで、ゆっくりとしおりを拾って、彼女のあとをついていった。

駅の改札を出ると、彼女はちょうど公園に続く道を歩いているところだった。少しだけ空中に浮いているかのような、音を感じさせない足どりで。

やがて公園の入口にさしかかった。道の両側には桜の木がつらなり広がっていて、その瞬間にわかに強い風が吹き、葉がかすれてざあっと大きな音を立てた。

実のところを言えば、こうして僕が彼女のあとについていく必要はどこにもなかった。拾ったしおりは、本を買うともれなくはさまざまてくる、出版社の広告が入った紙のしおりで、どう考へてもわざわざ電車まで降りて届けるシロモノではなかっただし、それに届けるだけならば、すぐに追いついてしまえばいいだけの話だった。それでも僕は一定の距離を保ちながら、もくもくと彼女と公園の中を歩いている。

こここの公園に来たのは初めてだった。地図を見ると、かなりの広さがあるようだった。きちんと整備が行き届いてはいるけれど、かといって届きすぎてない野生ゾーンもあって、その絶妙な適当さがなんだかいい感じだった。敷地のまん中あたりには沼もあり、僕らはたもとに沿って丸く歩いた。

それにしても。

好みいと思っている人、右手に本をぶらんと提げながら歩くその後ろ姿をただ見ているだけで、どうしてこんなにもうれしい気持ちになれるのだろう。うれしいの塊がくうっと胸の底から込み上げて、ツンとあふれ出てくる先は口でなく、なぜ鼻や目なのだろう。

そんなことを考えながらも、彼女の足はどんどん進み、やがてバッと視界が広がったかと思うと、芝生のある広場に着いた。ぽつんぽつんとある低い木、その中の一本を選び、たもとにべたんと腰を下ろした。そしてずっと右手に持っていた本をふたたび読み始めた。



彼女が本に夢中のあいだ、僕は隣の木のもとに座ってごろんと寝転び、右手を枕にしながら彼女をじっと見ていた。平日の朝のハンパな時間だからなのか、人はほとんど見かけず、ときどき犬の散歩をしている人が通るだけで、その芝生には僕と彼女しかいなかった。僕はとにかくものすごい遠慮のない見方だし、これだけつけられてんだからちょっと気付けよ、くらいのものだったけれど、彼女はてんで意に介することなく、やっぱり少し読んでは顔を上げ、読んでを繰り返していた。

いつまでこうしているのだろう、と僕は自分に問いかける。おいおい、仕事はどうすんのアンタ？ と自分にツッコむ。のんべんだりとただただ過ぎ行く、朝の公園でのゆるゆるとした時間。確かに気持ちがいい。それに気付いただけでもよかった。でもそろそろ帰らなきゃとゆっくり立ち上がる。そしてそのまま帰り道へと行こうとする頭とは裏腹に、身体はなぜか彼女のいる木のたもとへと近づいていくのだった。

すっかり泣きモード入っている彼女を前に、このまま立ち去るのもへんだし、かといってどう話かけていいのかも分からぬ。名前どころか第一、僕は彼女について何も知らない。だからどうすることもできず、でくのぼうのようにつつ立っているしかなかった。

しばらくして、彼女はうそのようにケロリと泣き止み、手の平で涙を拭ったかと思うと

なんか、すんませんと小声でボツリと言った。それからゆっくり、自分のことを話しかめた。

とにかく本が好きだということ。好きすぎて、それゆえにすぐに読み終えてしまうのが惜しくて、本に出てくる人たちとお別れするのがさみしくて、ぐっと入り込みそうになると読むのをやめて、言葉を深く噛みしめ、できるだけ少しずつ読み進めるようになっていること。その、顔を上げた時に見える景色は、できるだけ何も世界を壊さないほうがいいということ。その点公園はいちばん適しているので、毎回クライマックスになると、電車に乗ってわざわざ公園にやってくること。「そしたらね、本の中のシーンも公園になったんです。主人公の女人人が、ここに別れた恋人がよくここに来ると知って、もう一度会いたくて公園に探しに来るんです。偶然を装おうと思ってたら、向こうの方から声をかけて来て。その時、ほんまにその瞬間におにいさんが声をかけて来ました。だからめっちゃびっくりして、ほんまとうそがよう分からんようになってもうて………」

僕は人さし指を口の前に当て、しいっと言った。

「ほら、うぐいすの鳴き声が聞こえてけえへん？ ほらほら」

すると彼女は耳を澄ましながら、僕につられて人さし指を口の前に当てるしぐさをした。

それはさっきまで、彼女がしおりがわりにしていた指だった。